

(第一回)

2020(令和2)年度入学試験問題

国 語

(試験時間：50分)

《注 意》

- (1) 問題は

一

 ～

三

 まであります。
- (2) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに記入してください。
- (4) 解答に際して、句読点・符号などが含まれる場合には1字分として数えます。

城 西 大 学 附 属

城 西 高 等 学 校

一

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

二〇一二年六月の国会で、音楽などの著作物のいわゆる違法ダウンロードの厳罰化を含む改正著作権法が成立しました。

改正案が提出された ^aハイウェイのひとつには、CDの売り上げ低下の原因を違法ダウンロードに求める産業界（の一部）の考えがあるとされています。真偽は定かではないですが、^①こうした考えが送り手にも受け手にも存在感を示しているのは事実だと思われます。 ^A違法ダウンロードの厳罰化が、はたして問題の根本的な解決につながるのでしょうか。その答えは「否」です。

音楽ソフトや漫画雑誌の売り上げ減が、小中高生のお小遣いの使途が携帯電話などの通信費に変わったためだという ^bシテキは以前からあります。だが、私見では ^Iここで起こっている変化はもつと本質的なものです。そう、インターネットや携帯電話の普及（情報化の進行）はこの問題についておそらくふたつの変化をもたらしている、と僕は考えています。

ひとつはコンテンツをただ「受け取る」だけの快楽（映画を観る、本を読む、音楽を聴く）が中心だったポップカルチャーに、消費者の側が「打ち返す」「参加する」快楽を大きく付与したことです。漫画、アニメ、ゲームなどのキャラクターのいわゆる「二次創作」はインターネットの普及で大きく ^cカソクし、まさに参加型コンテンツの代名詞であるボーカロイドがヒットチャートや通信カラオケのランキングを ^d席巻している現象はその代表例でしょう。テレビ番組でもソーシャルメディア上の「^e★」が盛り上がるか否かが、今、番組の訴求力 ^fを検討するひとつの基準として注目されています。

^Bもうひとつは ^②情報そのものにつく「値段」がゼロ円に近づいていることです。情報化の進行は、飛躍的に情報（テキスト、音楽、映像など）を供給過多にした。その結果、情報の値段は限りなくゼロ円に近づく。テキストにせよ、音楽にせよ、映像にせよ、原則的にコピー可能なコンテンツ（情報）そのものに、人はお金を払う価値を感じない。価値を感じるとすればそれはその人（発信者、作家など）を「応援したい」という気持ちの表現に、です。人は入れ替え可能なものよりも、入れ替え不可能なものに対して相対的に価値を認めやすい。そのため一方で値上がりしているものがある。それは体験（コミュニケーション）に他なりません（ここ一〇年、CDの売り上げが落ちて ^gもフェスのたぐいが盛況なのはこのためです）。

そしてこのふたつの変化とともに、消費者の側から発信（コミュニケーション）する快楽こそが、今、価値を帯びており換金可能であることを示している。 ^C批判を浴びがちなCDに握手券や選抜総選挙の投票権を ^hフゾクさせる国民的アイドルグループの手法も、既存のソフトビジネスが行き詰まった結果、コンテンツではなくコミュニケーションを売る（この人を応援したい、という気持ちを表現することは気持ちがいいのでお金を払ってもやりたいと人間は考える）という発想が ⁱタイ

トウしてきたと考えたほうがいいでしょう。

③ 楽曲それ自体はユーチューブの公式チャンネルでいくらでも聴くことができる。ここにはお金を払う「価値」は生まれない。しかしメンバーと「握手」して応援メッセージを「直接伝える」こと、総選挙に投票して彼女たちの芸能人生を「直接応援する」ことは、今ここで自分が参加しなければ成立しない。そしてそれを実行（表明）することは気持ちがいい。ここには間違いなくお金を払う価値が発生しています。

情報化が進行すると、コンテンツ（情報）自体ではなく、それを媒介としたコミュニケーションこそが価値を帯びる。これはコンテンツビジネスのあり方を根本から書き換えかねない、極めて大きく本質的な変化のはずです。D この原則を理解することのない「著作権」談義にはほとんど意味はないでしょう。

こんな話があります。僕の知人の若い映画監督（入江悠）が、あるインディーズ作品（『SR サイタマノラッパ』）が評価され、新宿の大きなシネマコンプレックスで、一日一回のレイトショーで上映されたことがあります。最初の何日かは客入りが好調だったのだけど、ある日まったく客が入らない日があった。何かと思って調べてみると、その日同じシネコンでサッカーワールドカップの日本代表戦をライブ中継していたことがわかった。「いくらい映画を撮っても、^④これでは勝ち目がないと思った。だってこの試合はその日しかやっていない。でも、僕の映画は明日もまったく同じものが上映されるんですから」と僕にこの話をしながら監督は苦笑していました。彼は「映画の敵はもう映画じゃないんですね」とも述べていました。妥当な認識だと思います。そしてこの問題は、前述した音楽ソフトの消費形態の問題と相似形をなしている。

（宇野常寛『日本文化の論点』）

※1 訴求力：読者・視聴者など対象に訴える力。

※2 フェス：「フェスティバル」または「フェスタ」の略語で、祭や祭典などを意味する語。

問一 めめ部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄 A D に当てはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア したがって イ そして ウ たとえば エ しかし

問三 — 部①「こうした考え」とあるが、どのような考えか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 違法ダウンロードの厳罰化を含む改正著作権法が成立したという考え。
イ 違法ダウンロードをすることへの抵抗感が薄くなっているという考え。
ウ 違法ダウンロードがCDの売り上げ低下の問題を招いているという考え。
エ 違法ダウンロードの厳罰化が受け手に存在感を示しているという考え。

問四 空欄 ★ にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号

で答えなさい。

ア 実況 イ 製作者 ウ 感情 エ 鑑賞

問五 — 部②「情報そのものにつく『値段』がゼロ円に近づいている」とあるが、その結果、人々の価値観はどのようなものに変化したか。次のア～エからもっともふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 供給過多となったコンテンツには、お金を払う価値を感じなくなった。

イ コミュニケーションなどの入れ替え不可能なものに対して、お金を払うようになった。

ウ コンテンツではなくコミュニケーションを売るという発想に対して、価値を感じるようになった。

エ 誰かを「応援したい」という入れ替え可能なものに対して、価値を感じるようになった。

問六 — 部③「楽曲それ自体」とあるが、筆者は「楽曲それ自体」をどのようなものだと考えているか。「～もの」につながる形で本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問七 — 部Ⅰ「ここ起こっている変化はもっと本質的なものです」とあるが、本文を通して筆者はどのようなことが本質的な変化であると述べているか。本文中の言葉を使い五十文字以内で説明しなさい。

問八 — 部④「これでは勝ち目がないと思った」とあるが、なぜ勝ち目がないのか。現代の人々の価値観にふれながら、「映画」「試合」という言葉を必ず使い、八十文字以内で説明しなさい。

問九 本文の内容にもっとも合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア C Dの売り上げを向上させるには、違法ダウンロードを厳しく取り締まることが必要不可欠だ。

イ 情報化が進行した現在、人々は音楽などの入れ替え不可能なものに対して相対的な価値を見出している。

ウ 自分が直接参加しなければ体験できないものこそが、現代の換金価値の対象となっている。

エ 人々が音楽に対し「受け取る」だけの快楽に満足しきれなくなったため、違法ダウンロードが増加している。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

お祭り会場は、小学校よりもまだ道を下ったところにある、公民館のそばの神社だった。みのりは今まで一度も使ったことのない近道を使うことにした。

（たぶん、田んぼの奥に見える竹やぶを突っ切ると、小学校のプールの真裏にでるはず……）

あぜ道に下りて、駆け足で直進、田んぼの向こう側に渡り、雑草が生い茂る斜面をよじのぼったところまでは良かった。^① 竹やぶの中に侵入した途端、迷子になった。

どこまで進んでも同じ景色だ。払っても払っても、みのりの背の高さほどもある雑草が体中にまとわりついてきた。草で手や顔が切れているのか、あちこちがビリビリと痛かった。みのりは泣きながら、竹やぶの出口を探し求めた。

^② その間、二時間も三時間もたったような気がした。実際には、迷っていたのはほんの十分程度だ。

その後無事に竹やぶから抜けだして、目にとまった公衆電話から家に電話をかけた。みのりから連絡を受けたおばあちゃんはすぐに迎えにきてくれた。ふたりで手をつないで、^③ インキョに帰ってきたのが、六時前。泣いているみのりのためにおばあちゃんは珍しくラジオをつけた。時刻を知らせるアナウンスの後、ラジオから流れてきたのは、お父さんの好きな島倉千代子だった。いつまでも泣き止まないみのりの頭を、おばあちゃんはやさしくなでた。お腹すいたねえ。そうだ。お母さんのおいしいご飯、食べようか……。

今も、「りんどう峠」を聞きながら食べたカボチャの煮物の味を、みのりは忘れていない。あの時、おばあちゃんが迎えにきてくれなかったら、自分はもうなっていたのだろう、と思うこともある。いくら家のすぐ近所だといっても、山のほうに迷い込んでいたら、もうなっていたかわからない。

みのりが届けた六個のおはぎを、おばあちゃんはその日のうちに全部食べた。食の細かいおばあちゃん、一気に食べられる量じゃなかった。お母さんから、からっぽになった弁当箱を見せられて、^④ みのりの胸はざわざわした。再び、テレビでみた老人のことを思いだした。その老人は、さつき昼食を食べたばかりなのに、食べてないといって、一日に何度も食事をとろうとしていた。家族が止めると暴力をふるい、きたない言葉を口にしていた。元は穏やかな性格だったというその老人は、病の進行とともにまるで別人のように変わっていった……。

翌朝、みのりは学校へいく時に、たまたま外のトイレからでてきたおばあちゃんを見かけた。みのりの声になかなか気づいてくれなかったけど、五回目の「おばあちゃん！」で、ようやく顔をこちらに向けた。みのりが大きく手を振って、いつてきまあすという、おばあちゃんも曲がった背中をわずかに起こすような仕草をして、手を振り返した。いつもと変わらない、しわだらけの、穏やかな笑

顔だった。

⑤ おばあちゃんがひとりでしゃべってる、と、今度はお母さんがいいでした。

「聞こえてくるのよ、話し声が」

「ほらね、だからいったじゃん」

弟はなぜか得意気だった。

お父さんは、それでもまだ信じなかった。気のせいじゃないのか、などといった。でもその数日後、ガレージに車をだしにいく時に、インキヨの戸の向こうから聞こえてくる声に気づいた。

⑥ ばあさん！ 誰としゃべってんだ！ お父さんは思わず声を荒げた。思いきり開けた戸の向こうには、窓際にちょこんと座ったおばあちゃんの後ろ姿がただだった。

みのりも、みんなより少し遅れてその声を聞いた。運動靴を洗いに外の水道へ向かう途中、ふと気になって、インキヨの前で足を止め、耳を澄ませた。すると聞こえた。

ぼくちゃん……、ぼくちゃん……。

それは、とてもやさしい、おばあちゃんの声だった。

みのりに語りかける時よりも、もっとやさしい。

みのりの首筋に鳥肌が立った。おばあちゃんは、おばあちゃんにしか見えない相手と会話している。その相手というのは、おばあちゃんにとって、きっと誰よりも、みのりよりも、大好きで大切な存在に違いない。

五月に入って最初の土曜日。午後二時からおばあちゃんの誕生日会がひらかれた。お父さんの仕事と、みのりの部活動、両方休みなのはこの日のこの時間しかなかった。

初めて家族全員がインキヨに集まった。

お母さんは、歯が丈夫でないおばあちゃんのために、プリンでできたケーキを買ってきた。モンブランが良かったとブツブツ文句をいっていた弟は、一番大きく切り分けられたのを自分の皿にとった。みのりにすすめられて、おばあちゃんは上にのったキウイをひとかけら口にした。

ケーキを食べたあとは、各自用意してきたプレゼントをおばあちゃんに手渡した。お父さんは新しいラジオ、お母さんはストールだった。みのりはスーパーおおはしの化粧品売り場で見つけた、つげのくしをプレゼントした。何も用意していなかった弟は、歌をうたった。幼稚園時代にちびっ子カラオケ大会で入賞したことのある弟は、「ハッピーバースデー」の歌を熱唱した。弟がうたい終わると、おばあちゃんは静かに両手を合わせて目を閉じた。

自分の誕生日会だということを、理解できていないみたいだった。実際、その日はおばあちゃんの誕生日じゃなかったのだけ。

おばあちゃんの話す内容が、だんだん理解できなくなっていった。

囁ささやいているようだった話し声は次第に音量を増していき、突然怒りだしたり泣きだしたり、大口を開けてわははと笑いだしたりもした。

「おばあちゃんって、笑った顔がカエルみたいだね」

と、弟はのんきな顔をしていった。

おばあちゃんは、杖を必要としなくなった。

何も持たずに庭や家の周りを歩き回り、家族の知らないあいだに山の中にまで入っていった。途中で何度も転び、転ぶたびに自分ひとりで起き上がった。顔やひざから血を流しながら、でも、ちゃんと歩いて帰ってきた。

「おばあちゃんって、足悪いんじゃないの？」

弟は不思議そうな顔をしていった。

「骨でも折られたら大変だわ……」

弟の横で、お母さんはため息をついた。

危険だからと、おばあちゃんが歩き回るのを、お母さんは何度も止めさせようとした。インキヨの戸に鍵をつけたり、つかえ棒で開かないように固定したり、時には襟首つかまえて、インキヨの中に強制的に連れ戻したり。

不思議なことに、何をやっても、おばあちゃんはその都度上手に抜けだすのだった。

^⑦「おばあちゃん、どんどん元気になっていくね」

弟の発言に、お母さんはいつそう深いため息をついた。

お母さんが思っているほど、おばあちゃんの足腰はやわじゃないのだ。

(今村夏子『あひる』)

問一 ―― 部①「竹やぶの中に侵入した途端」とあるが、この時点でのみのりにとってもっとも近い建物を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お祭り会場 イ 小学校 ウ 公民館 エ 神社

問二 ―― 部②「その間、二時間も三時間もたったような気がした」とあるが、そのように感じた理由としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 迷子になった自分がこのまま竹やぶの中から出られないのではないかと不安で仕方がなかったから。

イ 迷子になり、やっとかけることのできた電話に出てくれたおばあちゃんに早く迎えに来てほ

しかったから。

ウ いくら通り慣れた道とはいえ、今日に限ってはいつまで走っても竹やぶが続いている気がしたから。

エ 無事に帰れるはずだとは思いますが、お祭りが終わってしまうのではないかと心配だったから。

問三 ―― 部③「インキョ」とあるが、ここはどのような場所だと読み取ることができるか。二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問四 ―― 部④「みのりの胸はざわざわした」とあるが、その理由としてもつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんの行動がテレビで見た老人の行動に徐々に似てきたことに思い当たり、このままだとおばあちゃんも家族に暴力をふるうような人物に変わってしまうのではないかと恐れたため。

イ おばあちゃんが一度に多くのおはぎを食べてしまったことを知り、老人であるにもかかわらず何も気にせずに自分ができること以上のことを行ってしまう行動力を不審に感じたため。

ウ おはぎを作ったのはみのりであるのに、それに気づかないまま全てを食べてしまったおばあちゃんに対して大きな悲しみを感じ、その姿はテレビで紹介されていた老人ともよく似ていたため。

エ 六個ものおはぎを自分一人で食べたことを覚えていないおばあちゃんを見てテレビでの事例と同じであると思いあたり、今後おばあちゃんから暴力をふるわれることを想像し恐れたため。

問五 ―― 部⑤「おばあちゃんがひとりでしゃべってる」とあるが、

(1) おばあちゃんのひとりごとを聞いた順を、次のア～エの記号を並べかえて答えなさい。

ア お父さん イ お母さん ウ みのり エ 弟

(2) 「みのり」には、おばあちゃんはどうのような人物と話しているように見えたか。二十五字以上三十字以内で説明しなさい。

問六 ―― 部⑥「ばあさん！誰としゃべってんだ！ お父さんは思わず声を荒げた」とあるが、「お父さん」が声を荒げた理由としてもつともふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 家族と同じような事実を目の当たりにしてにわかには信じられなかったものの、受け入れざるを得ない事態に気づき冷静に対処しようと意気込む気持ち。

イ 家族のみんなが聞いていたというひとりごとを自分も聞き、「ばあさん」がいつもの「ばあさん」ではなくなってしまうことをどうしても受け入れたくない気持ち。

ウ いつもの「ばあさん」からは考えられないようなことをひとりでしゃべっていたことに驚き、思わず声を荒げないとその場の出来事に対応できなかったほど驚いた気持ち。

エ 何度も声をかけないと振り向いてもらえないほど弱ってしまった「ばあさん」の状態をかわいそうに思いながらも、ひとりごとを言うのは不可解だと感じる気持ち。

問七 ―― 部⑦ 『おばあちゃん、どんどん元気になっていくね』弟の発言に、お母さんはいつそう深いため息をついた」とあるが、なぜ「元気」になることが「いっそう深いため息」につながるのか。説明しなさい。

三

次の二人の会話文と表を読み、それぞれの問いに答えなさい。

A：①と②の表を見比べてみて、読み取れる情報の違いはどんなことですか？

B：②の表の数字の方が具体的です。

A：そうですね。単位表現のちがいです。②の方が実際の人数を一の位まで厳密に表現しているのに対し、①の方では単位を工夫することによって概数で表すことで、（ a ）効果があります。

①の表では単位表現に注意してください。例えば「20」と表現されていたらそれは（ b ）人であることになります。

B：わかりました。ではもしこの表で「800人」を表したかったら（ c ）と表現すればいいわけですね。

A：その通りです。ところで、②の表を見て気づくことは何かありますか？

B：はい。（ d ）に通う人の数が一九八三年から二〇〇五までずっと減り続けていることを読み取ることができます。

A：そうですね。ここからはそれだけ少子化が進んだということがわかります。では①の表を見ると、大学に進学している人の数はどうでしょう？

B：えーっと、一九八〇年は（ e ）人だったのが二〇一五年ではその（ f ）倍くらいに増えています。

A：現在の日本では二人に一人が大学に進学する時代だといわれているのもこの数値から読み取ることができますね。二〇一五年では大学進学率は約五十五％にもものぼるそうですよ。

児童・生徒・学生の数推移 [表①]

単位：万人

年次	小学校	中学校	高等学校	大学
1960	1259	590	324	63
1970	949	472	423	141
1980	1183	509	462	184
1990	937	★	562	213
2000	737	410	417	274
2015	654	332	332	286

（表①・②ともに 学校基本調査 文部科学省より）

児童・生徒の数の推移 [表②]

単位：人

年次	小学校	中学校	高等学校
1983	11,739,452	5,706,810	4,716,105
1984	11,464,221	5,828,867	4,891,917
1985	11,095,372	5,990,183	5,177,681
1986	10,665,404	6,105,749	5,259,307
1987	10,226,323	6,081,330	5,375,107
1988	9,872,520	5,896,080	5,533,393
1989	9,606,627	5,619,297	5,644,376
1990	9,373,295	5,369,162	5,623,336
1991	9,157,429	5,188,314	5,454,929
1992	8,947,226	5,036,840	5,218,497
1993	8,768,881	4,850,137	5,010,472
1994	8,582,871	4,681,166	4,862,725
1995	8,370,246	4,570,390	4,724,945
1996	8,105,629	4,527,400	4,547,497
1997	7,855,387	4,481,480	4,371,360
1998	7,663,533	4,380,604	4,258,385
1999	7,500,317	4,243,762	4,211,826
2000	7,366,079	4,103,717	4,165,434
2001	7,296,920	3,991,911	4,061,756
2002	7,239,327	3,862,849	3,929,352
2003	7,226,910	3,748,319	3,809,827
2004	7,200,933	3,663,513	3,719,048
2005	7,197,458	3,626,415	3,605,242

問一（ a ）にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 推移を把握しやすい イ 詳細な数を把握しやすい
 ウ その年の男女比を把握しやすい エ 一年ごとの変化を把握しやすい

問二（ b ）にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 二千 イ 二万 ウ 二十万 エ 二百万

問三（ c ）にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 0.8 イ 0.08 ウ 0.008 エ 0.0008

問四（ d ）にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大学 イ 高等学校 ウ 中学校 エ 小学校

問五（ e ）にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 四百二十三万 イ 百四十一万 ウ 百八十四万 エ 二百十三万

問六 (f) にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 二・五 イ 二 ウ 一・五 エ 一・二

問七 「児童・生徒・学生数の推移①」の表の (★) にあてはまる数字を、表記上の原則に従って三ケタの概数で答えなさい。解答は算用数字でも漢数字でもかまいません。

問八 次のア～オの内容について、表の読み取りとして正しいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 二〇〇〇年代に入ってから中学校に通う人数は三百万人台になった。

イ 一九六〇年の小学校の仕組みは現在の小学校の仕組みとは異なっていた。

ウ 高等学校に進学する人数は一九八〇年代の後半から一九九〇年にかけて増加した。

エ 十年間で大学に通う人の数が二倍以上に増加した期間がある。

オ 小学校・中学校・高等学校に通う人の数が減っている理由は少子高齢化のためだ。

